

奄美の集落力—シマの空間配置と環境保護—

西村 知

Power of ‘Shima’ Community in Amami: Spatial Arrangement and Environmental Conservation

NISHIMURA Satoru

鹿児島大学法文学部

Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University

要旨

奄美大島の瀬戸内町における集落力について集落の空間配置を中心に考察した。シマと呼ばれる集落は時代の変化に対応しながら自然環境を有効かつ持続的に利用してきた。この自然環境の利用においては豊年祭などの祭儀が重要な役割を果たしてきた。そして祭儀を基礎とした環境が集落の空間配置にも大きく影響してきた。今後もこの空間配置は変化しながら時代に合った空間配置を形成することであろう。

はじめに

奄美大島の人々は、社会経済の急激な変化に適応してきた。琉球王国、薩摩藩、アメリカと強力な外部の力に翻弄されながらも、彼らは自然環境との関係性を、独自の文化を守りながらも条件の変化に適応して進化させてきた。人々の生活の基礎となるのが、「シマ」と呼ばれる集落である。筆者は、このシマが環境の利用、保護といかに関わってきたかを知るために奄美大島の最南西端にある瀬戸内町を訪れた。この地域には、視覚的に非常にわかりやすい形でシマが形成されている。シマは、海岸線沿いに連なるきれいなデルタ型の扇状地である。肉眼でも十分にわかる。グーグルマップで鳥瞰的に確認するとさらにくっきりとデルタが確認できる。扇状地は、美しい海へとつながる。

「里」としてのシマの空間配置と環境保護

近年、生態学者らは、人と自然が織りなす持続可能な空間の構成要素として、「里」、「里山」、「里海」という言葉を使うようになってきている。これらの用語、特に「サトヤマ」の概念は、環境保護に興味を持つ人々に一般に用いられるようになり、海外でも紹介されるようになってきている。集落（里）に隣接する山（里山）や海岸部（里海）において、人間の影響の入った生態系が作られてきた。特に、炭が燃料として普及する以前の日本列島においては、里山への負荷は高く、里は里山の植生が崩壊するのを防止するために様々な規則を作った。

奄美大島のシマには、まさに、この、「里」、「里山」、「里海」の三点セットがコンパクトに揃っている。里の司令塔としての機能は、信仰と祭りに支えられてきた。建築学者の研究で示されるように、この機能は空間配置としても確認できる（永田ら 2003）。シマの海岸部（「カネク」）から扇状地、里、神聖な山につながる道を「カミミチ」と呼ぶ。シマでは女性のシャーマン（「ユタ」）が祭儀を行う。里には、ユタが祭儀の準備をおこなう「トネヤ」、祭儀を行う「アシャギ」が存在した。そしてこれらの祭儀が行われる広場は「ミヤー」と呼ばれた。シマの人々は、豊年祭などの機会に、ミヤーに集まり自然に対して畏敬の念を持って、その恩恵に感謝した。人々は、踊り、相撲を取って楽しみながら自らの生活に隣接する自然環境を理解した。

環境保護単位としてのシマの今後

シマは、血縁関係を基盤とした氏族集団であり、現在でも氏神信仰は継続している。しかし、多くのシマでは、人口減、高齢化が進み、限界集落化が進んでいる。このような状況に対して、瀬戸内町では、空き家バンクの情報提供を行うなどして若年層の移住を促進している。私が訪れた瀬戸内町の集落では、移住者に、強制ではないが、いずれかの氏に属することを勧めていた。空間配置、空間で育まれてきた知識、技術、思いをそのままの形で継承していくことは容易でない。しかし、集落の外に住むシマ出身者とのネットワークを強固にし、シマをオープンにして移住者を増やしていくことによってシマの祖先が守り続けてきた環境知を次世代に継承していくことは、奄美大島のみならず、日本、あるいは人類の知的財産を守っていくことにつながるであろう。

引用文献

永田隆昌・高見徹志・松永 達・九十九 誠 2003. 奄美大島西部地域集落における信仰祭祀の空間秩序:集落の空間構成原理に関する研究 その2. 日本建築学会計画系論文集, 563 : 305-312.